



Title	アンドレー・ジョアン・アントニール『ブラジルの富』（1711年）についての覚え書き
Author(s)	東, 明彦
Citation	ブラジル研究. 2011, 7, p. 73-83
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106527
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アンドレー・ジョアン・アントニール 『ブラジルの富』（1711 年）についての 覚え書き

東 明彦

はじめに

15 世紀以降、アフリカやアジア、アメリカへ進出したポルトガル人は、アジアでは既成の広域交易圏に「寄生」¹する形で商業活動を展開したが、ブラジルでは、奴隷制にもとづく砂糖生産を組織し、1570 年から 1670 年にかけて、大西洋砂糖市場を支配することになった。

ブラジルの砂糖産業は、肥沃な粘土質の土壌、マサペー（Massapé）が広く分布し、動力源や運送手段として水力の利用が容易であった北東部地方で特に発展した。そこでは、初期には、貨幣を媒介とせず、「物々交換（バーター取引）」の形で先住民の労働力が利用されたが、王室の先住民奴隷化禁止の方針や疫病による先住民人口の激減を契機として、16 世紀後半から 17 世紀前半にかけて、主要な労働力はアフリカ人奴隷へと次第に移行し、17 世紀後半に

は、黒人奴隷労働にほぼ完全に依存する、独特のプランテーション社会が生まれた。²

ところが、1670 年以降、カリブ海地域のオランダ領、イギリス領、フランス領で砂糖産業が勃興すると、ブラジル砂糖経済は停滞期に入った。³その後、17 世紀末（1693 年頃）、ブラジル南東部内陸部のミナス・ジェライス地方で金鉱脈が発見され、18 世紀初頭、いわゆる「金の時代」が始まると、植民地の経済活動の重心は南東部地方へ移った。

このようなブラジル植民地経済の動向は、砂糖生産の中心であった北東部地方に大きな影響を及ぼし、従来の農業社会に重大な変動をもたらした。

本稿で取り上げるアントニール『ブラジルの富』（1711 年）が執筆されたのは、このような時期、つまり金鉱脈発見を契機とするブラジル植民地経済の転換期であった。

『ブラジルの富』は、植民地時代の社会・経済史研究に欠くことのできない基本史料として 19 世紀以降、高く評価されてきた。16 世紀から 17 世紀にかけて書かれたブラジルに関する文献の多くが、いわば「地誌」的な性格をもつものであったのに対して、本書は、17 世紀末―18 世紀初頭のブラジルの主要な産業、つまり砂糖生産、タバコ栽培、鉱山業、牧畜業などの生産技術や労働力、またその生産高や収益など関する詳細、かつ専門的な記述を含んでいたからである。⁴

一方、『ブラジルの富』には、「謎」ともいえる問題がいくつかあった。例えば、著者は、筆名（偽名）を用いており、19 世紀末まで、その人物像は分からなかった。また、本書は、刊行直前に発禁となり、没収・破棄されたが、近年にいたるまで、その理由は明らかではなかった。さらに、本書の構成は通常の著作とは異なる点があるが、その理由についても、はっきりとしたことは分からなかった。

ところが、近年、アンドレー・マンシュイ・ディニス・シルヴァ（André Mansuy Diniz Silva）らの研究により、そのような謎は、その多くがほぼ明らかになった。そこで、本稿では、上述した問題、具体的には、(1)著者は、誰

か？、(2)なぜ、直前に発行が禁止されたのか？、(3)各部の構成がいびつであるのは、なぜか？、などの問題に絞り、「覚え書き」の形で、その概要を紹介することにする。⁵

第1章 著者は、誰か？

『ブラジルの富』の題扉 (frontispício) には、著者名として、André João Antonil (アンドレー・ジョアン・アントニール) の名前がある。また、序文に、O Anonymo Toscano (トスカナ生まれの匿名者) と記載がある。トスカナ生まれとあるところから、著者は、イタリア人であると考えられていたが、アントニールの人物像については、長い間、謎であった。

『ブラジルの富』の著者は誰か、という問題に検討を加え、アントニールという筆名 (偽名) を使った人物の正体を明らかにしたのは、ブラジルの歴史家カピストラノ・デ・アブレウであった。⁶ デ・アブレウは、著者がイタリア生まれのイエズス会士であると想定したうえで、実在したイエズス会士ジョバンニ・アントニオ・アンドレオニ (Giovanni Antonio Andreoni) の名前が、実質上、アンドレー・ジョアン・アントニール (André João Antonil) のほぼ完全なアナグラム (語句転綴) であること、また Antonil の語末の l は、luquense (トスカナ地方のルカ Luca 生まれ) の最初の文字である可能性がきわめて高いことを見いだしたのであった。⁷

デ・アブレウにより、本書の著者であると確認されたジョバンニ・アントニオ・アンドレオニは、1649年2月8日、イタリアのトスカナ地方ルカで生まれた。ペルーシア大学で法学を修め、1667年5月20日、ローマでイエズス会に入会し、その後1681年1月、著名なイエズス会士アントニオ・ヴィエイラ (1608-1697) にしがたい、念願のブラジルに向けて、ポルトガルのリスボンを後にした。それ以降、主にブラジル北東部バイアに滞在し、イエズス会の学院の学院長 (Reitor) やイエズス会の管区長 (Provincial) などを歴任した。彼は、ラテン語や法学に優れ、交渉にも長け、国王の信任が厚かったと言われている。1716年3月13日に、バイアで、67歳で没した。ブラジル滞

在は、34年に及び、砂糖産業の中心であった北東部の事情に通じていた人物であった。⁸

第2章 なぜ、直前に発行が禁止されたのか？

『ブラジルの富』の初版本（1711年）は、稀覯本として名高い。

初版本は、リスボン国立図書館所蔵の1冊、パリ国立図書館所蔵の1冊、リオデジャネイロ国立図書館所蔵の2冊、ロンドン大英博物館所蔵の1冊、サンパウロ大学法学部図書館所蔵の1冊、およびリオデジャネイロで個人が所蔵する1冊の計7冊が現存するのみである。

なぜそれほどに少ないのか？それは、同書が、異端審問や世俗の裁判所の許可に加え、1711年3月6日には、刊行への最後の許可である国王顧問の許可を得た上で印刷に付されたにもかかわらず、国王ジョアン5世の命令で、刊行直前（同年3月20日）に没収、破棄されたからである。

この間（つまり、3月6日から3月20日の間）、何があったのか、なぜ発禁となったのかは、長年にわたり謎であり、そのため、いくつかの仮説が提示されてきた。

例えば、アントニールの著作の中に、本国の官僚に対して反抗を煽る「政治プログラム」の性格を見だし、王室は、本書が独立の触媒となる可能性を恐れ、発禁処分としたと指摘した者もいたが、根拠となる史料は何ら示されなかった。

また、本書が、砂糖製造の秘密をあまりに詳細に明らかにしていることが発禁の理由となったと考える者もいた。一見、もっともらしく思われるこの仮説も、マンシュイも指摘するように、刊行年が1711年であることを考えると、受け入れがたい。というのは、18世紀初頭には、オランダ、イギリス、フランス等の植民地では、当時の記録から分かるように、砂糖製造や栽培技術は、すでにブラジルよりも進んでいたからである。⁹

発禁の理由については、マンシュイが、カダヴァル侯爵家文書の中から、新史料である1711年3月17日付けのポルトガル海外領審議会意見書を発見

したことで、ほぼ明らかになった。この意見書は、やや長文であるが、その中に、「『ブラジルの富』には、[ブラジルで] 発見された金鉱へいたるすべての道が詳細に記述されており、また近い将来発見されるであろう、あるいは今後採掘が始まるであろう他の金鉱のことが書かれている。同書に書かれている、これらの点に関する詳細な情報と同様に重要な他の多くの詳細な情報は、熟慮すれば分かるように、結果として、[ポルトガル] 王国や王室が依存しているかの管区[ブラジル植民地]を保持する上で、大きな弊害をもたらすことになるので、それらを公表せず、他の国に知られないようにするのがきわめて重要である。」¹⁰と記されていた。

海外領審議会のこの意見書を受けて、1711年3月20日付けで国王の命令が出されたのである。いわく、「陛下は、(中略)『ブラジルの富』という題目で最近印刷に付された書物を回収するようにご決定になり、宮廷の王室代理官(Corregedor)に印刷所が所持する書物を没収するようにお命じになった。また陛下は、宮廷の控訴院判事に手数料としてすでに渡された書物も国王に返還するようにお命じになった。」¹¹

つまり、アントニールの著作が問題視されたのは、異端審問や世俗の裁判所においてではなく、植民地経営を統括する機関「海外領審議会」においてであり、問題となったのは、金鉱山に関する詳細な情報であった。特に、金鉱地帯への道筋は、最高機密であったが、本書には、それが詳細に記載されていたのである。当時の植民地情勢や国際情勢を考慮すれば、海外領審議会のメンバーが機密保持の観点からその出版を認めることができなかったのも、当然であった。

ミナス・ジェライス地方では、『ブラジルの富』が刊行される数年前に、「エンボアーバ戦争」¹²が起こっており、植民地には不穏な空気が漂っていた。一方、ヨーロッパでは、「スペイン継承戦争」(1701-1714)が継続していたが、イギリスと同盟し、1703年以降オーストリアのカール大公をスペイン国王に推すポルトガルは、ブルボン朝のフランスと敵対していた。このような状況下、ポルトガルは、ブラジル植民地、特に金鉱地帯へのフランスの侵入を強

く恐れていた。海外領審議会のメンバーが過敏になる理由が、現実存在していたのである。

『ブラジルの富』に関する意見書の中で、海外領審議会は、海外領に関する文献については、今後、同審議会の事前検閲が必要であるという趣旨の意見を具申しているほどであった。¹³

第3章 各部の構成がいびつであるのは、なぜか？

『ブラジルの富』は、4部で構成されているが、各部の頁数に大きな差異がある。具体的に言えば、第1部「砂糖」が、全体（総頁数205頁）の半分以上の105頁を占め、3編（各編12章）計36章からなるのに対して、第2部「タバコ」は、21頁（12章）、第3部「金鉱山」は、53頁（17章）に過ぎず、第4部「牧畜・皮革」にいたっては、12頁（6章）しかない。

これは、本書の執筆の経緯と深く関係しているとともに、著者の執筆の意図とも密接なつながりがあった。

マンシュイによると、第1部は、最初独立した書物として構想・執筆され、その後、第2部以降の執筆と第1部の加筆が行われた。第1部（レトリックに富む文体）とそれ以外の各部（簡素な文体）に見られる文体上の差のほか、本来、著作全体の題扉の直後に配置される「序文」（Proémio）が第1部の扉の直後に配置されていること、また「序文」には砂糖生産に係わる事柄しか記載されていないことが、その論拠の一つになっている。独立した書物として構想・執筆された著作が、「序文」を含めて、そのまま本書『ブラジルの富』の第1部に流用されたことからこのような形になったとマンシュイは推測している。¹⁴

「序文」にあるように、著者は、北東部の有名な砂糖農園「セルジペ・デ・コンデ」¹⁵に8ないし10日間滞在した後に、その時に得た知識を大幅に利用して第1部を執筆したが¹⁶、「序文」にはその年代は記載されていない。『ブラジルの富』に記載されたパイアでの砂糖価格と他の同時代史料（1677-1710）との比較研究¹⁷によると、第1部第1編第12章には当時の砂糖価格が1アロ

一バ (14.688 kg) につき 1,200 レイスと記載されており、この部分は、1693—1698 年の間に執筆されたと考えられる。一方、第 1 部第 3 編第 9 章 (章題: 「砂糖の新・旧価格」) に記載された最新の砂糖価格 (16 トスタン=1,600 レイス) は、その部分が、1704—1707 年の間に執筆されたことを示している。

つまり、以上をまとめると、著者は、砂糖農園「セルジペ・デ・コンデ」滞在 (おそらくは 1693—1698 年の間) の直後に、「砂糖」を主題とする本書の第 1 部を執筆したが、その後、1704—1707 年の間のある時期に、新しい史料にもとづき、砂糖価格などを改訂し、1707—1709 年末の間に、第 II 部「タバコ」、第 III 部「金鉱山」、第 IV 部「牧畜・皮革」、および献辞などを執筆した可能性が高い。

それでは、いったいなぜそのような経緯をたどったのであろうか?

イザベル・カストロ・エンリケとアルフレド・マルガリドによると、著者は、本書において、農業の絶対的な重要性を明らかにしようとしており、重農主義者の先駆的な側面があるという。そのような著者は、奴隷制と農業を基盤とするブラジル社会の秩序が崩壊することを強く危惧し、家系も、能力も、精神的な資質も関係なく、幸運だけで、昨日の家僕が今日の主人になりうる「金の社会」の弊害を告発しようとしたという。¹⁸

つまり、著者が繰り返し、さまざま形で述べているのは、「ブラジルとポルトガルの真の鉱山」(as verdadeiras minas do Brasil e de Portugal)¹⁹は、砂糖やタバコの栽培という農業活動であり、最近発見された金鉱山は、人々を幻惑させる、いつわりの富に過ぎない、という考えである。鉱山地帯のミナス・ジェライス地方に送られるため、北東部沿岸部の都市や町では奴隷や商品が不足し、その結果、それらの価格が上昇した。そのため砂糖産業からは、必要な労働力 (奴隷) が奪われ、砂糖農園は労働力の不足により荒廃し、ブラジル農業は危機に陥っていると考えたのである。²⁰

鉱脈の発見は、人々を幻惑し、金の幻想に捕らわれた多くの人は、鉱山地帯へと向かった。そのような人の中には、どのようなことをしても富を得ようとする人間も多かった。そのため、著者には、彼らが旧来の道徳や良き習

慣を喪失してしまったように見えた。

次の引用、特に最後の一文は、著者のそのような心情を吐露したものである。

ブラジルで豊かな〔金〕鉱山が見つかったとの話が評判になると、金持ちも一文無しも、あらゆる人々が各地から〔ミナス地方に〕押し寄せた。（中略）また、人々がほしがるとあらゆる品物のうちで最良の品がミナスに送られたので、すべての品物の価格は高騰し、そのため砂糖農園主やサトウキビ栽培農民は、多額の負債を抱えることになってしまった。その上、黒人〔奴隷〕の不足で、それまでは余裕をもって行っていた、ブラジルとポルトガルの真の鉱山ともいうべき砂糖やタバコの生産にも大きな支障が生じることになってしまった。それに最悪であるのは、鉱山から産出される金の大部分が砂金や硬貨の形で他の王国に流出してしまい、ポルトガルやブラジルの諸都市にとどまるのは、ごくわずかに過ぎないということである。そのほかに、首飾りや各種の耳飾りに使われる金もあるのだが、今日それらをどっさりと身に付けているのは、貴婦人方というよりは、ふしだらな生活に身を染める混血女や黒人女のほうだという始末である。そのため、良識ある人で、神がミナスでこれほどの金を発見させたもうたのは、その金でブラジルを罰するためであったと言って嘆かない人はいないのである（後略）。²¹

17世紀後半以降、カリブ海地域の砂糖植民地との競合により、ブラジルの砂糖生産は停滞したが、当時の人々には、奴隷価格上昇による労働力の不足が砂糖産業の停滞の主因であるとの考え方が強かった。そのような思いを強くもつ著者アントニールは、金鉱発見以降、農業を基盤とする旧来の社会秩序の崩壊と道徳の退廃を目の当たりにし、当初の計画に変更を加えた。つまり、17世紀末からの金生産がブラジル経済・社会にもたらした深刻な影響やその弊害を告発するために、すでに執筆を終えていた「砂糖」に関する著作に、第2部－第4部を付加したのである。各部の構成がいびつであるのは、著者の執筆の意図がそのように変遷したことと密接な関係があるといえる。

注

¹ 川北稔『ヨーロッパと近代世界』、放送大学教育振興会、1997、p. 27。

² Stuart B. Schwartz, "Canefield and Factory, The Impact of Sugar Production on Slave Life in Northeastern Brazil", in Alberto Vieira, ed., *Slaves with or without Sugar: Registers of the International Seminar*, Funchal, 1996, pp. 247-276, pp. 247-250.

³ ブラジルの砂糖産業は、そのまま衰退したわけではなく、ブラジルの主要産業であり続けた。金七紀男『ブラジル史』、東洋書房、2009、p. 53。

18世紀中頃にも、ブラジルの砂糖生産は、新世界砂糖生産高の約10%を占め、独占的な支配は失ったが、依然として世界市場で重要な地位を占めていた。その背景には、(1)ヨーロッパでの砂糖消費の継続的な増大、(2)ブラジルでの粘土製糖による上質の白砂糖の製造、(3)ポルトガル本国やその植民地での砂糖需要の増大があった。当時、ブラジルの全輸出額の半分は、砂糖であった。Herbert S. Klein, "The Slave Experience in the Caribbean: A Comparative View", in Vieira, ed., *op.cit.*, pp. 143-181, p. 152.

⁴ André João Antonil, *Cultura e opulência do Brasil por suas drogas e minas*, (Introdução e comentário crítico por André Mansuy Diniz Silva), Lisboa: Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1ª edição portuguesa (revista da edição francesa de 1968), 2001, p. 26.

⁵ 本稿は、歴史学研究会編『世界史史料 7 南北アメリカ先住民の世界から一九世紀まで』、岩波書店、2008、pp. 113-114、「55 ブラジルの植民地開発（一七世紀後半—一八世紀初め）」の「解説」として執筆した原稿の参考資料にもとづき、紙幅の関係で「解説」に掲載できなかった情報を補い、それに大幅な加筆・修正を加えたものである。ただ、そのため上掲書の「解説」と本稿には、内容や論旨に重複する部分がある。

⁶ 1880年代、カピストラーノ・デ・アブレウ (Capistrano de Abreu) がアントニールの正体を突き止めた経緯については、André João Antonil (João Antonio Andreoni, S.J.), *Cultura e opulência do Brasil (sic) por suas drogas e minas com um estudo bio-bibliographico por Affonso de E. Taunay*, São Paulo: Companhia Melhoramentos de São Paulo, 1923, pp. 41-47; José Honório Rodrigues, *História da História do Brasil, 1ª Parte Historiografia Colonial*, São Paulo: Companhia Editora Nacional, 1979, pp. 393-398 に詳しい記載がある。

⁷ Antonil, *op.cit.*, (1923), p.43; Antonil, *op.cit.*, (2001), pp. 22-23.

⁸ Serafim Leite S.I., *História da Companhia de Jesus no Brasil*, Tomo VII, Séculos XVII-XVIII Assuntos Gerais, Rio de Janeiro: Instituto Nacional do Livro, 1949, pp. 110-114, 120-121; Antonil, *op.cit.*, (2001), pp. 21-24.

⁹ *Ibid.*, pp. 46-47.

¹⁰ *Ibid.*, p. 52.

¹¹ *Ibid.*, p. 45.

¹² ミナス・ジェライス地方の金鉱は、17 世末「バンデイランテ」と呼ばれた「サンパウロの住民」により発見された。ところが、ゴールドラッシュとともに、「サンパウロの住民」ではない新参の移住者（エンボアーバと呼ばれた）の数が増え、両者の間に紛争が起こった。この紛争は、エンボアーバ戦争と呼ばれる。

¹³ *Ibid.*, p. 53.

¹⁴ *Ibid.*, p. 33. 「序文」への署名は、O Anonymo Toscano とのみ記され、『ブラジルの富』全体の題扉にある筆名（偽名）は、記載されていない。

¹⁵ 砂糖農園「セルジペ・ド・コンデ」は、1560 年代第 3 代ブラジル総督メン・デ・サ(在任 1557-1572) が設立。メン・デ・サの死後、娘フェリパが相続 (1573 年、フェリパは、リニャーレス伯フェルナンド・デ・ノロニャと婚姻)。1618 年、フェリパの死後、リスボンのイエズス会サント・アントン学院、バイアのイエズス会学院、バイアのミゼリコルディア (信徒会) の間で、所有権に関する係争が起こる(この間、事実上、リスボンのサント・アントン学院が管理経営)。1655 年、係争者間の和解により、農園の主要部は、リスボンのイエズス会サント・アントン学院の所有に帰す。1759 年のイエズス会追放後、王室に没収される。Stuart B. Schwartz, *Sugar Plantations in the Formation of Brazilian Society, 1550-1835*, Cambridge, 1985, pp. 489-497. 拙稿『サント・アントン学院がブラジルに所有する農園およびその収益に関する報告』に見る 17 世紀ブラジル北東部の砂糖農園、『ブラジル研究』第 5 号、pp. 87-100 参照。

¹⁶ Antonil, *op.cit.*, (2001), p. 34, p. 66.

¹⁷ *Ibid.*, pp. 34-38.

¹⁸ André João Antonil, *Cultura e opulência do Brasil*, (Introdução de Isabel Castro Henrique e Alfredo Margarido), Lisboa: Alfa, 1989, pp. 11-12.

¹⁹ Andreoni, Giovanni Antonio; *Cultura e opulencia do Brasil*, Lisboa, 1711, p. 180.

²⁰ Antonil, *op.cit.*, (2001), p. 39.

²¹ 拙訳、歴史学研究会編、『世界史史料 7 南北アメリカ先住民の世界から一九世紀まで』、p. 113. Andreoni, *op.cit.*, (1711), pp. 179-181.

主要参考文献 (Antonil 関係のみ)

Andreoni, Giovanni Antonio. *Cultura e opulencia do Brasil*, Lisboa, 1711.

Antonil, André João, (João Antonio Andreoni, S.J.) . *Cultura e opulencia do Brazil* (sic.) por
suas drogas e minas com um estudo bio-bibliographico por Affonso de E. Taunay, São
Paulo: Companhia Melhoramentos de São Paulo, 1923.

Antonil, André João. *Cultura e opulência do Brasil por suas drogas e minas*,
(Edição em fac-simile da edição Princeps de 1711 e comentário crítico por José Antônio
Gonsalves de Mello), Recife: Museu do Açúcar, 1967.

_____. *Cultura e opulência do Brasil por suas drogas e minas*,
(Texte de l'édition de 1711, traduction française et commentaire critique par Andrée
Mansuy), Paris: Institut des Hautes Etudes de l'Amérique Latine, 1968.

_____. *Cultura e opulência do Brasil*,
(Introdução de Isabel Castro Henrique e Alfredo Margarido), Lisboa: Alfa, 1989.

_____. *Cultura e opulência do Brasil por suas drogas e minas*,
(Introdução e comentário crítico por Andrée Mansuy Diniz Silva),
Lisboa: Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses,
1ª. edição portuguesa (revista da edição francesa de 1968), 2001.

Leite, Serafim S.I., *História da Companhia de Jesus no Brasil*, Tomo VII, Séculos
XVII-XVIII Assuntos Gerais, Rio de Janeiro: Instituto Nacional do Livro, 1949.

Rodrigues, José Honório. *História da História do Brasil, 1ª Parte Historiografia
Colonial*, São Paulo: Companhia Editora Nacional, 1979.

歴史学研究会編『世界史史料 7 南北アメリカ先住民の世界から一九世紀まで』、
岩波書店、2008。